

初級教科書 TOTAL JAPANESE による 授業の研究

岡野喜美子

はじめに

早稲田大学国際部の初級～初中級クラスでは、1994年9月から新教科書 TOTAL JAPANESE を使用している。この教科書は、ある程度学習歴のある学習者にたいし途中の課から使い始めるクラスをふくめ、7レベル(7クラス)で使用されているが、筆者はそのうちいちばん下の第1課から使うクラスを担当している。本稿では、TOTAL JAPANESE の著者のひとりとして広く本書の意図するところを理解し、有効に使用していただけるよう、実際に使用している教師としての実践と実感も踏まえ、本書の活用法、使用上の留意点、授業の工夫などについて述べることとする。

1 本の構成と特色

TOTAL JAPANESE は、4技能の学習を目的とする総合型の初級～初中級学習者向け教科書である。自然な会話力が身につくよう、談話機能の学習に力を入れている一方で、本格的に日本語を学習しようとする学習者が、将来中級学習へとスムーズに入って行けるよう、初級ながらしっかりと読み書きの学習も取り入れ、文法の基礎学習も重視している。全体は、「会話の本」Conversation 2冊、「読み書きの本」Reading and Writing 1冊、「文法・会話解説の本」Grammar and Conversation

Notes 1 冊の 3 種 4 冊の本からなる。各本はそれぞれ学習や使用の目的によって独自の役割をになって分冊とされているが、「聞き話す」と「読み書く」がばらばらにあるのではなく、「文法・会話解説の本」の各課で取り上げられた文法項目を共通項として、「会話の本」と「読み書きの本」は内容やトピック、語彙などがたがいに関連し合い、補い合っていて学習しやすくなっている。会話力養成だけを学習目的として「会話の本」のみを使用することも可能であるが、本格的に日本語を学習するには 4 冊のシリーズ本として使用することが必須である。

まず、各本を構成する項目は次のとおりである。

「会話の本」

- ・『会話』
- ・「応答練習」
- ・「談話練習」
- ・「ことば」

注) 「応答練習」の前に、主に難度の高い活用形などの練習を「文法練習」として入れてある課もある。

「読み書きの本」

- ・「漢字表」
- ・「漢字タスク」
- ・「読み書きタスク」
- ・「読みましょう」
- ・「読み物」

「文法・会話解説の本」

- ・「文法ノート」
- ・「会話ノート」

上記のような構成の各本の内容および特色は本書の Introduction に詳しいので以下、それを引用する。

1 「会話の本」

本書は、自然な会話表現を重視し、口頭のコミュニケーション能力の養成をめざしている。文法項目がその文法的な意味だけでなく、生きた談話の中でどのような機能を持ち、実際にどう運用されているかが学習できるようにになっている。会話は留学生が遭遇し経験するであろう場面やトピックを想定し、そこでよく使われる語彙や表現を入れて実用性をもたせた。

会話や練習はできるだけ漢字まじり文にしてふりがなをつけたが、漢字の少ない第1分冊は分かち書きにして読みやすさをはかった。ローマ字の使用は極力避けたいが、ひらがな、かたかなを習得していない初歩の学習者が予習に困難を感じることをないように1課から3課までの語彙表の語彙・表現にはローマ字を併記した。会話および練習はカセットテープに入れてある。

2 「読み書きの本」

読み書きの基礎を培い、中級につながる漢字力、読解力、文章力を養成するのが本書の目的である。会話表現とは異なる文章表現に初期から慣れ親しみ、正しく読み取る力ときちんとした文や文章を書く力がつくよう、学習段階に適した読み書きの材料を読み書きタスク・読みましょう・読み物で提供している。

文字の学習は、400漢字ができるだけ効率的に学習できるよう漢字タスクをつけるなど工夫した。「読み書きの本」と「会話の本」の各課の語彙、文法、トピックはそれぞれほぼ共通しているが、課によってはより書きことば的な語彙なども加えた。

3 「文法・会話解説の本」

本書は各課、文法に関する文法解説と話しことばに関する会話解説からなる。文法解説では、「会話の本」「読み書きの本」に共通の文法項目の意味や用法が1課ごとに取り上げられ、用例とともに解説してある。会話解説では、「会話の本」に盛り込まれた、話しことばに見られるさまざまな表現を扱い、実際の会話での使われ方や留意点、敬語やくだけた会話などについて解説した。5課までの日本語の例文にはローマ字を併記した。

本教科書シリーズによる学習時間は約 350 時間を要する。本教科書は、課によっては扱い方が異なることもありうるが、原則的には、「会話の本」のそれぞれの課で状況に応じた会話をまず学び、ついで「読み書きの本」の同じ課で読み書きを練習する、という手順を踏むのが効果的である。「文法・会話解説の本」は主に予習あるいは復習のために自宅学習用として使うとよい。(以上引用)

2 教授上の工夫と留意点(1)——初心者に教える場合

上記 3 種 4 冊の本を実際にいかに使って教えるか。すでに国際部で 2 年間使用されてきているので、担当のそれぞれの教師が工夫や苦勞を重ねて、さまざまな教科書使用法、活用法を編み出していることと思う。初心者に教える場合の工夫や留意点と、ある程度日本語の学習歴や知識のある学習者にたいして途中からこの本を使用する場合での工夫や留意点はやはり異なるところもあるので、まず、本章では、初心者向けのひとつの、あるいはときに幾通りかの使い方、教え方、教える順序などを具体的に述べ、次章で途中から使用するうえでの工夫点、留意点などに触れることにする。以下述べる順序はだいたい学習順序に従っている。

1) 文法を教える

文の構造や活用形、文型とその意味、用法上の注意などは、「文法・会話解説の本」の「文法解説」で説明されているので、まずそれを学習者に自宅学習で読んで来させる。クラスでの文法説明をできるだけ必要最小限にとどめ、むしろクラスでは、読んで理解してきたことをチェックする程度にできれば、文法導入としては成功である。解説が分かりやすく書かれているので、まったくの初心者であっても文法知識の自習は比較的容易に行われるようである。この文法の自習とほとんど同時に、学習課の新単語も覚えさせておき、簡単なクイズを行うことでことばの習得の徹底をはかる。

ついで、クラスでは、一文、一文の構造をきちっと学習する。より上の

段階での学習を視野に入れた場合、基礎的な文法力はぜひつけておかなければならないものである。近年、文法教育はとかく軽んぜられる傾向にあるが、決してそうであってはならない。4技能の基礎ともいえるべき文法力は、毎課、毎課積み上げて習得させたい。「会話の本」の中で「文法練習」として独立して文型や形が取り上げられている課は限られているので、構文の練習は教師がプリント類を用意したり板書したりして行うことになる。形の変換や穴うめや言い換えなどの伝統的な文型練習も駆使し、また、文法項目が知らず知らずのうちに練習できるような学習者中心のタスク、クラス活動などによって文の構造の基礎的な学習を行う。

実際の文型練習は、初級の場合口頭で行われることが多いが、そうした練習のあとでは、必ず書かせることで助詞の間違いや脱落、テ形の促音の有無などを確認していくことが望ましい。これによって口頭練習だけでは聞きもらしがちな文法ポイントをチェックできるので、書かせて確認する意味は学習者自身にとっても教師の側にとっても大きい。この際、教師の用意する練習問題のほかに、書きをとまなうタスクや書かせる宿題などを与えれば書きによる確認が自然に取り入れられよう。また、簡単なディクテーションもきちんと完結した文を意識させる練習として取り入れてもよい。このように、「きちんと言わせる」練習をしてから「きちんと書かせる」練習をしておくことは、あとで練習する自然な会話の口頭表現の影響を受けて、文法をあやふやな形のままごまかすように話したり書いたりするくせをもってしまうがちな学習者にたいして有効である。

TOTAL JAPANESE では、文法的な、より書きことばに現れやすい形と話しことばに現れやすい形のあるものは、第1課から両方を教え、使い分けに留意させるようにしている。

たとえば、「学生ではありません」と「学生じゃありません」の使い分けなども第1課の解説にあり、実際の授業でも使い分けを指導するようにしている。普通の会話では、めったに「～ではありません」は出てこないで、これは主に文法的な文、あるいは書きことばとして扱っていく。

初歩の学生にとっていろいろな言い方を学習することはたしかに一時的には負担になると言えようが、学習の最初からこうした使い分けに慣れさせるほうが長い目で見ていい結果をうむようで、学習者自身が次第に書きことばと話しことばの違いや改まり度の違いなどに敏感になってくる。「これは話しことばでも(あるいは、書きことばでも)使いますか」などといった質問を学習者がするまでになる。初級が終わるところになってはじめてこれらの違いに言及する教科書があるが、この本のこうした使い分けの導入の時期の早さと使い分けへの力の入れ方はこの本をかなり特色づけていると言えよう。

こうした例は、「している」と「してる」、「しなくてはいけない」と「しなくちゃいけない」、「してしまう」と「しちゃう」、「しておく」と「しとく」、「したのです」と「したんです」、「ので」と「んで」、「という」と「っていう」、「とても」と「とっても」、助詞の省略(落とし)など、いくつも扱われている。これらをどう練習していくのかというと、くずしていない形の方を主に文法練習として練習し、くずした形の方は、会話練習の中で扱うことになる。

2) 会話を教える

4技能の中では、話すことを教えるのがもっとも難しいと言えるかもしれない。学習者にとっても到達点が見えにくい技能であるが、それは学習者がイメージし期待する日常会話(おそらくは、かなりくだけた会話)と教える会話教材とのギャップが意識されることにもよろう。...「同年代の日本人大学生たちの会話についていけない。授業で習う会話とは違うようだ。」...これは、日本で会話を習う場合についてまわる問題点である。これについては会話学習にはステップがあり、それらのステップを踏んでいくことにより次第に会話力がついてくることをくりかえし学習者に理解させ、納得させる必要がある。会話学習がスムーズに行われ、会話力がつくかどうかは、ここに述べるような会話学習の方法について学習者の理解と積極的参加が得られるかどうかにかかっていると見えよう。

会話学習に入る前には、当然のことであるが、ことばや表現の意味を覚え、文の構造を知っていなければならない。「会話の本」の「ことば」を覚え、文法の学習が終わったあと、はじめて会話の学習に入るのである。

まず、「文法・会話解説の本」の「会話ノート」を読んで来させる。話しことばに特徴的な待遇、フィルター、あいづち、イントネーション、挨拶、表現・語彙、表現意図、応答の型、言いさし、くだけた会話、会話上の約束事、書きことばとの違いなどは、「会話ノート」に分かりやすく説明されている。会話練習はまずこの知識を得ることから始まる。

会話練習に入る時には、「会話の本」の「応答練習」から始める。この「応答練習」は、文型の QA (文法練習の中で行われる) 練習ではないことに注意する。質問と答という組み合わせになっているものもあるが、statement とそれにたいするコメント、statement と質問といったさまざまな応答の形式で成り立っていて、主に最短の機能を練習できるのが特色である。応答練習の目的は、その課の構文や文法項目の基本を踏まえつつ、会話らしい短いやり取りを身につけさせることにある。これは、できれば、教師と学習者の間で練習をする前に、LL でテープを使ってくりかえし話しことばの基本として耳と口を使って練習させたい。特に、インプットとして聞くことに集中して練習できるとよい。LL がない場合は、学習者に自分でテープを使って練習させる。授業でも、時間が許せば「応答練習」のすべてを、時間的に難しければ後述の「談話練習」に含まれていないものを中心に練習する。練習方法としては、キーセンテンスとキューを教師が与え、学習者は応答の型に合わせて答える。時には、教師の代わりにテープを使ってみるのも変化があってよいであろう。練習の段取りとしては、これらの「応答練習」を終わらせてから、次に述べる「談話練習」に入るやり方もあるが、たとえば、「応答練習」の1番をやったそのすぐあとに、1番に関係のある「談話練習」の何番かをやるという並行的なやり方もある。この並行的なやり方は、練習を単調にしないためにも、また練習のポイントを明確にするためにも有効であるので、時々取り入れ

るとよい。

「談話練習」は、「応答練習」よりも長いやりとりの中に、機能に重点を置いたり、挨拶や談話の約束事などもふくめたりしたもので、代入練習できるようにしている。代入練習は、見本となる短い会話を軽く覚えたあと代入のキューを与えて行ったり、見本となる会話を見ながら代入させたり、会話の役を相手と取り換えて行ったり、学習者の能力や学習時間によっていろいろなやり方をしてみる。単調さを避け練習に変化をつけるために、課によってやり方を変えてみるのもよい。キューの与え方も、口頭にしたりカードに書いたものを渡したりしてみるのもよいであろう。教科書にある練習が終わったあと、余裕があれば、たとえば、「スミスさんを何かに誘ってみてください。スミスさんは誘いに乗るなり、断るなりしてください」といった指示を出して応用会話をさせてみるのもよい。こうした「談話練習」を行って、ある程度の長さのやり取りに慣れ、談話の型が身についてきたら、はじめて「会話」の学習に入る。

「会話」のほとんどは「談話練習」で練習したミニ会話から成り立っているので、「談話練習」がすでに口慣らしとしても意味上も問題なく学習できているのなら、やや長いことを除けば難しくはない。イントネーションや間の取り方などに気をつけながら、2人あるいは2つのグループにそれぞれの役のせりふを言わせる。この際、読ませるよりはテープを使うか、教師の手本をまねさせるほうがよい。それぞれの役を男、女の学習者に言わせるうえで、問題がなければそのまま練習するが、男性的な物言い、女性的な物言いのあるものはその点を指摘して、それぞれ適当な表現に変えて練習させる。そのあと、「会話」の内容について、理解をチェックするためにQAを行ってみるのもよい。

会話の暗記、暗唱については、賛否のあるところであろうが、上記のような練習をした翌日などに、DP (dialogue performance) として、ジェスチャーなどを交えながら、会話の再現・実演をさせる。8ミリビデオに撮ったり、テープに録音したりして後でフィードバックできるようにし

ておくとよい。暗記、暗唱、実演はこれを苦手とする学習者もたまにいるが、できるだけ楽しい雰囲気の中で自然に行えるようにしたい。

学習時間に余裕のある場合は、このあと、教師がある程度主導権をもちながら、会話の一部を変えてさらに練習してもよい。さらに余裕のある場合には、ロールプレイをしたり、簡単なスキットをしたりして応用力を養う。

3) 文字(漢字)を教える

漢字の導入は第2課から始まるが、「漢字表」にある項目通りに進めていく。各課の漢字の導入と学習は、実際の授業では、ことばを学習したあと、文法や会話の学習に入る前に行っておくのが望ましい。練習する文法文や会話教材には新漢字がくりかえし出てくることが多いので、文や文章の読み書きの練習をするよりずっと前に新漢字が読み書きできるようにしておく。初期の学習段階では、筆順や漢字を書くコツなどを板書でいねいに指導するほうがよい。自由に書かせておくと、筆順や字形などで変な習慣を身につけてしまいがちである。しかし、ある程度進んだ段階まで来たら、新漢字の学習は基本的には自宅学習とし、クラスではチェックする程度でよいだろう。

漢字学習は読み書きの基礎であり、大人の日本語学習者にとって漢字の知識なくしての(ひらがなとかたかなだけの)読み書きというのはありえない。TOTAL JAPANESE は、文章の読み書きは中級に入ってからでよいという立場や考え方は取らない。そのため、400漢字の学習をめざしているが、それが孤立した新漢字だけの学習に終わることのないよう、「漢字タスク」で既習漢字の復習も交えながら漢字の基礎力と応用力を養う。同時に文法の練習としての文の書きや書くタスクの際も、できるだけ既習、新出を問わず漢字を使うよう指導していく。「読み書きタスク」は、文字の練習も総合的な読み書き能力も同時に楽しく練習できるようになっているので、できるだけ授業で練習させたい。

4) 読みを教える

ここで言う読みとは読解のことである。「読みましょう」のような一文の読解もあれば、「読み物」のような文章の読解もある。「会話」と共通する文法項目や語彙が学習済みなので、かなり読みは楽なはずである。

TOTAL JAPANESE では、文の意味や構造、文章の流れや内容を本当に理解しているのかどうか、「読みましょう」と「読み物」を使ってチェックすることができる。だれが何をしたのか、どっちが先に起こったのかなど、事実関係や前後関係に関する質問を用意してそれに答えさせるのもよいし、自分のことばで言い換えをさせてみるのもよい。日本語以外に共通語がある場合などには訳させてみるのも時に目先が変わってよい方法である。いずれにしても、会話練習で練習した軽やかな話しことばとは違う書きことばの文法的、文体的な折り目正しさに慣れさせ、学習者が自分で文や文章を書く時のよい見本とさせる。

読解の前提には、音読と黙読があり、読み物によってそのどちらかをさせる。音読は発音を見るというよりは文の構造や文章の流れをどの程度自然にとらえているかを見るためにさせてみる。音読がすらすらとできる学習者は、意味のあるつながりや切り方がわかっていることが多く、そこを見る目的で音読をさせる意味は決して小さくないし、自習で読み練習をしてきたかどうかのチェックにもなる。一方で、黙読だけをさせてから質問を受け、理解を深めたあと、内容や構文に関する質問をするというやり方もある。これらの QA は口頭で行う場合も読み書きで行う場合もある。

TOTAL JAPANESE の後半には、初中級に相当する「読み物」もあり、その中のいくつかはかなり読みごたえのある難度の高い文章である。文章を読むことを苦手とする学生たちの場合、読み物の難しさによっては、読む前に何らかの準備をさせることも必要であろう。たとえば、テーマに関係のある QA や導入をしてから読むとか、学習者自身の経験を話させてから読むとか、関連する視覚教材を見せるとか、読む「読み物」の種類や内容により準備段階を設けてから読みに入るといった工夫も欲しい。

5) 書きを教える

4 技能のうち、文などの書きがもっとも学習動機に欠ける技能である。これは授業の中で、タスクで書かせる、メモを書かせる、作文を書かせる、手紙を書かせるなど、積極的に取り入れないと、学習者は練習問題や宿題やテストの時ぐらいしか書かないことになりかねない。「読み物」にある作文例などを手本にして、学習した構文や語彙や文字を駆使して作文などを書かせたりする努力を重ねていくべきである。言うまでもないことであるが、文章を書かせるなかで、助詞や活用形などの文法チェックと同時に、話しことばを文章に持ち込まないよう、つねに注意していく。初級の教科書ではあるが、TOTAL JAPANESE では書きことばの学習が比較的容易にできるので、教える側もこの点につねに留意して指導したい。

3 教授上の工夫と留意点(2)——学習歴のある学生に教える場合

前項では、初心者に教える場合を中心に述べた。初心者に教える場合は、文法や漢字、会話、読み書きの基礎力をつけることに時間のほとんどが費やされるため、運用力をつけるところまで教えるのは時間的にも能力的にもなかなか大変である。しかし、新しいことを吸収しようとする学習者たちの熱意は時に既習者を上回るので教えがいがあがる。

初級の途中まで学習したことがある学習者やほとんど初級の文法だけを学習してきた学習者、聞き覚えなどで多少の日本語の知識のある学習者などにたいして TOTAL JAPANESE を使って教える場合は、やはり初心者に教えるのとは方法的、内容的に、また、学習者心理の面でも異なるものがあることに注意したい。以下、その相違点を中心に、簡単に触れることとする。

1) 文法を教える

すでに構文を知っていると思う場合、学習者はもう文法練習をする必要はないという反応を示したり、拒絶的な態度を取ったりすることがある。

真に構文の意味を知り使える場合は、文法練習を省略してもよいだろう。しかし、往々にして、うる覚えであったり正しい形が作れなかったりすることが多い。こうした場合は、学習者の弱い点だけを短時間におさらいして習得をはかると同時に、学習者自身が自分の弱点に気づき、ある程度学習にたいして謙虚な気持ちになるようにもっていく必要がある。学習を始めた課以前の課に出た語彙や表現を文法練習でできるだけ多く使用し、応用的な練習をすることによって自分がまだまだ未熟であるということを学習者に悟らせることも必要である。このほか、類似文型・類似表現などとの対照的な学習もこのレベルには向いているので、ぜひ進んで行いたい。

2) 会話を教える

会話能力では、既習者の場合大きく2つのグループに分かれる。ある学習者はかなり話すことに慣れ、聴解力もある。プレイスメントテストの結果、比較的低いレベルのクラスに入った主な理由は会話能力ではなく読み書き能力が低かったためであったりする。また、ある学習者は文法的には一定のレベルまで達しているが、フィルター、あいづちなどの会話の約束事や文型の機能的な面などを学習したことがなく、ごく基本的な会話がスムーズにできない。後者の場合には、できるだけ学習を始めた課までに取り上げられている「会話ノート」のポイントを拾い出し教えることにする。こういう異なる背景や能力をもつ学習者が同じクラスで学習をするわけであるから、指導内容が個別的にならざるをえないことも少なくない。教師によるインタビュー形式の対話などを個別的に行い、その結果をフィードバックするなどして個人指導の徹底をはかるのもよいだろう。クラスワークでクラス全体を満足させるためには、比較的会話能力にたけた学習者を上手に利用しクラスの全体を引っ張っていくようにするとよいだろう。教材的には、初心者向けよりはより多くの聴解教材を補助教材として用い、さまざまな日本語が聞き取れるようにしたい。TOTAL JAPANESEの「会話の本」の方針に沿うものであれば、聴解のようなインプットは多くてよい。

3) 文字(漢字)を教える

ひらがな、かたかなもそうであるが、漢字もすでに自己流の書き方を身につけてしまっている者が意外に多い。あまりに神経質な矯正は学習意欲をそぐことになろうが、基本ルールの違反には気づかせるべきであろう。これは学習者同士が自然に筆順などをチェックし合うようにもっていければ成功といえよう。時に漢字テストの中に筆順テストをすべり込ませるのもひとつの手である。学習範囲としては初心者の方の漢字学習よりは少し幅を広げ、authentic な教材もできるだけ取り入れていくとよい。

4) 読みを教える

漢字学習はもとより、文章を読むということをはほとんど経験していない学習者がかかりいることを前提に、初心者に読みを教えるのと同じように教える。書きことばに関する注意(話しことばとの違い)が学習しはじめた課より前の方の課の「会話ノート」や「文法ノート」などに説明されていることが多いので、教師はこれらを上手に拾い出し、読みの際に指摘するようにすべきである。初心者にたいするよりは、読みにかかわる質問を多く用意して深い読解力を要求してよい。

5) 書きを教える

読みで指摘し学習した話しことばと書きことばの違いを、実際に文や文章を書かせるなかで、しっかりと習得させたい。初中級・中級に向けて、話しことばと書きことばの混同にたいする文の添削はかなりきびしく行ってよいだろう。このレベルでは、基礎的な文法のチェックのためにも文や文章を書かせる機会をできるだけ多くもつようにしたい。

終わりに

教科書にどれだけのものが盛り込まれていようと、もちろんそれだけで十分な授業ができるわけではないし、学習できるわけでもない。教師の側からすれば、綿密な計画にもとづく教案づくりに役立つ「教師用指導書」と、その時々によさわしいプリント教材や絵教材、聴解教材のような準備

が必要であるし、学習者にとっては、クラスで学習したことを自宅で練習あるいは復習する質のよい材料ができるだけほしい。絵教材は現在、ある程度そろっているが、「宿題用練習帳」と、「教師用指導書」に載せるロールプレイやタスク、クラス活動のための材料などは現在作成中である。これらができあがれば、個々の教師の負担も少しは軽減されるであろうし、授業にも質的な向上が期待できるものと思う。